か わ ら 版

（新春号 NO 8）　2015/01/01 発行

年二回発行（1・7 月）

下関市立大学落語研究会 OB 会発行

電子版の扱いですので購読のためにはメールアドレスが必要となります。

編集長　　西川　隆喜

※大学同窓会 HP でもご覧になれます。

国敗れ早や古希迎ふ新春の

大和島根の明日は危うき　（NO6112）

直訳→我が国が先の大戦で敗れて今年で 70 年を迎えます。戦後の学校では「志」ではなく「夢」という日本人が一義的に「はかないもの」としてきた言葉を「良」として教え続けてきました。結局のところ、独善的て己にとって不都合な事は何でも国や他人任せにしてしまう軽い国家となり果てています。政治家・学者・経済人なども極一部の人達を除けば語るに足りない状態です。かような日本の現状を勘案すれば、将来はまことに危ういと思わざるを得ないと思われます。

(関門橋と唐戸から門司港に向かう連絡船)

(萩の松下村塾)

2015 年元旦　迎春

全国各地・海外でお暮らしの市大落語研究会 OB・OG のご家族の皆様のご健勝と一層のご活躍を心よりお祈りいたします。

昨年は理研（独立行政法人理学研究所　理事長　野依良治）の小保方 晴子（おぼかた はるこ）研究員による「STAP 細胞はあります!」という「科学する者の発言とは到底思われない」発言やねつ造実験の発覚、NHK スペシャル『魂の旋律 ～音を失った作曲家～

を何ら検証することなく放送し、後日ゴーストライターの存在が明らかとなった事件、あるいは朝日新聞社による「吉田証言報道と慰安婦問題誤報・ねつ造」事件の結末のお詫びに至るまで20年以上も放置した事件の発覚。いずれも国のトップを走る組織で行われていたことには驚かされました。結果これらの発表や記事から明らかになったことは、「報道の自由」を叫ぶ報道機関そのものが「真実の報道ではなく受け狙いの商業報道に終始している」ことを露呈したということに尽きるのであろうと思われます。そして、これら一連の報道は国民の信頼のみならず国の信頼を著しく貶(おとし)めることになってしまいました。

最近はテレビのニュース報道などでキャスターが、放送時間内に氏名等の訂正とお詫びを伝えられることが散見されることに気づかれている方も多いと思いますが、報道機関は「公」な立場であることを自ら再確認し猛省してもらいたいものです。

唯、日本人にとって心から喜ばしい出来事もありました。それは出雲大社宮司の千家尊祐(せんげたかまさ)氏の長男国麿(くにまろ)氏と高円宮憲仁親王の第二女子・典子女王の秋のご成婚であった。「国譲(くにゆず)り」の神話にもあるように、大和朝廷(現皇室125代)に平和理に下った出雲(84代)政権との時空を超えた久しぶりの結びつきに、平和を願う国民の一人として心からお慶び申し上げることとなりました。

さてさて、今年もどんな出来事で一喜一憂させられることやら・・・・・

(編集局)

愉快な仲間達(間島健一氏からのお便り)

・後方の関門橋は昭和48年の完成ですので、よく見ると出来たてのほやほやで湯気が上がっているのが解りませんか?
・髪形や衣服は当時の流行ですが今時の若者からすればダサイの一言でしょう!
・これでも卒業アルバム委員ということで・・・・おまけの人もおられます。

(左から尼子・大塚・沖井・細井・本人・浅海の各氏)

そもそも落研とのなれそめは、もう44年も前のことになりますが、年配の方はよくご存じの、市大玄関左手裏の産婦人科の向かいにあった「竹内マンション(通称)」に下

宿したところからでした。この竹内マンションは、入学の年に新築された2階建ての、朝夕食付の下宿（当時四畳半10,500円）で、新築とはいえ元は鶏小屋だったそうで、建築資材も廃材を利用したものだったと聞いています。老いた鶏は絞められて、人様の食卓に上っていたらしく、隣の部屋にいた同期生は、よく首を絞められる夢をみるとか言っていました。

竹内マンションの大家さんは、当時70～80（？）歳くらいの老夫婦で、禿げた頭の人の良さそうなおとなしいおじいさんと、ド近眼で白髪頭を振り乱して、甲高い声をあげながら動き回る、背中がまるくなったおばあさんでした。記憶に残っていることは、おばあさんの名前が百合子さん？だったと思うのですが、おじいさんがよく“ゆりちゃん”と年不相応に呼んでいたことを思い出します。また、食事に出されるご飯が、保温した残りご飯の上に、新しいご飯を重ねて入れていくため、白飯のはずのごはんが、ジャーの底の方にいくにつれ、黄色みとともにいやな匂いが増していったことを記憶しています。いつもマヨネーズをかけて、匂いをごまかして食べていました。

この竹内マンションの、私の向かいの部屋に入居したのが、落研創立者細井資伸さん（49年卒・・・正確には卒業がちょっと遅れたかな？芸名楽狂）でした。当時下宿で一番「うぶ」な男として、皆からかわいがられて（変な意味ではなく・・・）いたと思います。生真面目？で青春真っ只中だった細井さんは、女性については全く無知で、下宿人の中でも最も女性経験の深い同期生に、よく女性の扱い方？なんぞの教えを乞うていたようです。その甲斐あって、今の奥様を射止められたようです（竹内マンションで結ばれたとか？？？）。また、このころにギターのコードもマスターし、皆でよく歌っていました。青春ですねぇ！！

さて、この細井さんが落語とパチンコ狂いだったのですが、市大に落研を創ると言い出し、「尼子さん（笑和）」「沖井さん（笑司）」「大塚さん（金艶）」「浅海さん（圓さん）」（共に49年卒）という仲間を引き込みました。ところが、設立の条件に発起人なるものが、たしか8名必要とかで、あと3名名前を借用したいという話があり、同じ竹内マンションの私と有田さん（49年卒）、工藤さん（49年卒　芸名関亭寿考？）の3名が名前を貸しました（記憶違いの部分があれば失礼！）。これが、そもそも落研との腐れ縁の始まりです。

そもそも私は、落語を聞くことが好きでした。私が落語を好きになったのは、5歳～10歳ごろの間、家にテレビはなく、あるのはラジオでした。両親は、漁業・農業・サラリーマンと3つの仕事を掛け持ちでやっていましたので、朝早くから夜遅くまで仕事をしていました。夜私が布団に入ると、両親はまだまだ起きていましたが、いつもラジオがかかっていて、落語・講談・浪曲がよく聞こえていました。小さいながらも、これらの話の中身は理解でき、その物語が面白くてついつい引き込まれてしまいました。その経験からか、大学時代も落語を聞くということが楽しかったので、細井さんからの申し出に、即了解した訳です。いまでも、落語・講談・浪曲を聞くのは好きで、誰々ひとり会な

んかを聞きに行っております。

落研創立時の名前貸し以来、落研の発表会やらいろいろな場で、話を聞かせていただくとともに、部員の方々とお付き合いをするようになりました。また、本来の趣味の写真を生かし、一席噺している時の記念写真なんかも撮らせてもらったりしておりました。その間、おもしろい出来事がたくさんありましたが、今でも忘れられないおもしろかった出来事は、追い出し寄席だったか？楽狂さん（創立者細井さん）が演じた「八五郎出世（妾馬）」で、なぜか落ちが「鶴出世」になった話と、文化祭？の素人のど自慢大会（のような催し）で、晋平（51年卒）が着物を着て歌った「君が代」ですね。

大学4年になった時、人のいい楽狂さんは、卒業アルバムの制作という仕事を、どこからか引き受けてきました。落研同期の5人と、アルバムの写真撮影に都合よく使えると思ったのか、写真部の私も製作委員に引き入れられて、ねらいどおり卒業生の顔写真撮影にこき使われていました。その制作中に、記憶に残る事件もありました。全国の大学での学生運動も終盤のころではありましたが、他大学の複数の活動家が、市大のたった一人の活動家を大学内で襲うという事件があり、襲われた市大の活動家は、竹内マンションの前にあった産婦人科に逃げ込んだということでした。その影響で、この事件の直後から卒業するまで、私服の刑事さんが大学を取り巻いており、アルバム用の写真を撮りに行く先々で、刑事さんからどこにいくのか？写真撮影の目的は？あなたの本籍は？という質問を何回もされたことを覚えております。これも懐かしい思い出の一つです。

卒業後就職先ですが、富士ゼロックスに入社いたしました。選んだ理由は、写真が趣味だったことから、富士ゼロックスの日本側の親会社が、富士フイルムだったことと、コピーも写真の一部と思ったからでした。さらに決め手は、会社の設立日が昭和37年2月20日。これは私とちょうど10歳違いでした。これも何かの縁と思うと同時に、面接で志望理由を聞かれたら、このことを是非話そうと思っておりました。残念ながら質問されなかったですが・・・。

ちなみに、この富士Xerox（Zeroxではありません）ですが、いい会社でしたね。外資ということもあり、社内の雰囲気が自由闊達、言いたいことは遠慮せず言って構わない、仕事はまかされることも多く、よしやってみろ！で自由に仕事をやらせてもらいました。失敗して責任を問われるという事もありませんでした。企業規模も、大きく躍進しましたね。私が入社の時と今を比較してみると、従業員数が7,000人から45,000人へ、売り上げが690億円から1兆1,300億円へと、超優良企業ですね。

就職試験での思い出を二つばかり。

一つ目は、初めて企業説明会を聞きに行ったのが、損保だったのですが、説明会なので何の準備もなく広島まで出かけていき、説明を受け試験案内は追って連絡しますとの事でしたが、折角だからちょっと面接をやりましょうということになりました。中身のある話は何もできず下宿に戻り、試験案内を待っていたのですが、待てど暮らせど

試験案内が来ないので、事務室にこれこれでと話をしたところ、それは落ちたのですと、あっさり言われてしまいました。都会から遠く離れた下関だと、最前線の就職情報が分からず、大都市との情報格差がいかに大きいかを、身をもって感じたときでした。

二つ目は、富士ゼロックスの入社試験の決め手で、面接対策をいろいろと考えましたが、表面だけ取り繕っても面接官にはすぐ見抜かれると思いました。そこで、自分の得意の土俵「写真」に質問を誘導しようと思い、何を質問されても、必ず写真に結び付けた返答をしました。結果、面接官も最後は写真に関する質問になり、これはやった！と思いましたね。現在の試験で、こんなことを言うと即落ちてしまうと思いますが、当時面接官に、『勉強はしておりません。毎日写真ばかり撮っておりました』と、堂々と答えたのを覚えています。それでも合格したのですから、いい時代だったのでしょうね。

勤務地はほとんど東京（約33年間）でしたが、一度だけ2年間ばかり大阪に単身で赴任しておりました。この時期に大阪に勤務していた金ちゃん（49年卒　大塚さんこと金艶）と、時々中之島の交差点で待ち合わせ、男二人の色気なしで、勤務先のまじめな話題などを酒のさかなに飲んでおりました。

その後東京に戻り、金ちゃんも東京転勤となったので、1～2か月に一度は金ちゃんとの飲み会を、今でも続けております。仕事の話、金儲け？の話（儲かったことはないけれど）、落研メンバーの近況や昔話に、華を咲かせております。この飲み会は、毎回あっという間に時間が過ぎ、気がつくと午前様ということになっております。このことを、金ちゃんは奥様に、ずっと私のせいで、いつも午前様になると釈明していたようですが、今ではおかげさまで私と飲む日は、公然と午前様になれるようです。

また、たまに東京に出てこられる楽狂さん（細井さん）や、笑仲（51年卒　森永さん）、西川さん（なぜか本名　52年卒　朗志？好志？）との飲み会にも参加させてもらい、今も楽しく笑いが一杯の交流をさせてもらっております。

現在ですが、会社勤めは5年前の57歳でリタイアし、世間でよく言われる悠々自適の人生を送っております。きっかけは、40歳時の会社の研修の題材の一つだったのですが、会社勤めが終了する60歳までの「38年間」で、働いている時間が「約10万時間」だそうです。そして、平均寿命を80歳とすると、一般的な退職後の60～80歳の間の「20年間」で、自分の自由時間が、同じく「約10万時間」あるとの事です。退職後、働いていた期間の約半分の『20年間』で、この『10万時間』をあなたはどう過ごそうと考えていますか？60歳になってからでは、手遅れになりますよ、という問い掛けでした。私が考えたのは、「自分にとって何が一番幸せなのか」を考え直してみた結果、まず働くことではないということをすぐに感じました。結局一番幸せと思うものの一つは、60歳以降も楽しく付き合える人脈があること。そのためには自分から人脈を作り上げようと思い、積極的に人と人のつながりに関わってきました。もう一つは、自分のやりたいことを実行していくこと。興味あることには躊躇せず、まず飛び込んでみよ

うということでした。

そして楽しくやっていくために必要なものは、「時間」と「資金」と「体力」と思い、定年退職すると、「時間」と「資金」はそれなりにありますが、「体力」だけは年とともに落ちていきます。それも50歳を過ぎれば、坂を転げ落ちるように体力が低下していく姿を、実際にテニス仲間の先輩に見てきました。話をはしょりますが、というようなことで、自分の計画よりは2年遅れましたが、「体力」はまだそれなりに残っている57歳で退職しました。

今は、40歳から20年かけて築いてきたテニスの人脈、近所の人脈、写真の人脈。高校の人脈、大学の人脈、会社の人脈等に、積極的に自分から声を掛けて、数には困ることのないほど、幅広くお付き合いをさせていただくことができております。

また、趣味の写真は、撮影、現像、展示会鑑賞と出展、コンテスト応募のほか、写真連盟の活動、ニコンカレッジの参加、近所の大学の生涯学習の参加等、適度に忙しく動き回っております。他にも、関東では、落語会、映画、美術館、博物館など興味ある催し物も多く、そのたびに鑑賞に出かけております。

長々と書いてしまいましたが、これからも末永く、金ちゃん、楽狂さんはじめ落研の方々と、楽しいお付き合いが継続していければと思っております。

このような投稿の場をいただき、ありがとうございました。書いているうちに40年前の大学時代の色々な出来事や、みんなの顔が鮮明に浮かび、なつかしく思い出されました。

最後に、同期の5人の噺家のなかでは、軽妙な口調でしゃべる笑和さん（49年卒 尼子さん）の落語が、個人的には好きでした。黒井村の田んぼでピカピカのトラクターを操作しながら、一席とかやっているのでしょうか？また、あの圓ちゃん（49年卒 浅海さん）の愛車のNコロ（当時人気のスバル N360）は、卒業するまで大学前に路上駐車していましたね。パーツを盗られボロボロになって動かなくなっていましたが、廃車にはしたのでしょうか？また元気な小便を提供していただいた笑司さん（49年卒 沖井さん）、これが発行されるころには、元気を取り戻してください！

間島健一 （S49 卒　香川県立高松高校出身）

全国行脚で「OB・OG」こんにちは!!

関西空港を本拠地とするピーチ航空(LCC)が平成24年3月に就航してほぼ3年を迎える。当初新千歳と福岡の二路線で便数も少なく使いがっては悪かったが、現在は海外路線は除いて国内線だけでも新千歳・仙台・成田・松山・福岡・長崎・鹿児島・那覇・石垣の9路線があり、特に新千歳・仙台・成田・福岡・鹿児島・那覇の便数は多く早朝7時過ぎの出発時刻にも搭乗可能な大阪の南部に住んでいる者にとってはまことに有難い次第である。おまけにジェットスタ

一の新千歳・成田・福岡・大分・熊本・沖縄便もあり、ほんまに大助かりですわ!

そんなこともあり、今年は割と全国の OB・OG の生の記事を集めに積極的に全国行脚に出かけることにした。何度も原稿の依頼や追い込みの連絡をするのも手間がかかり、自ら足を運べば写真や記事も即座に GET できると考えたからである。所用で出かける時はリスク回避のため ANA を使うが、急ぐ旅でもなければ皆さん LCC の利用も一考ですよ!

さて、今回は宮崎の有田さん・下関の沖井さん・東京の大塚さんの三人の「福山 OB・OG 会」以降の近況を写真とともにコンパクトに以下でお伝えします。

①7 月 11 日(金)都城の霧島酒造㈱に有田格(S49 卒　宮崎県立大宮高校出身)さんを訪ねる!!

本社で受付嬢(奥さんではありません)と有田さんのツーショット!　面倒見がよく従業員からも慕われているようでした。あと何年かは勤務するとのことであり、南九州にお越しの折はお立ち寄りくださいとのことでした。

②9 月 30 日(火)小倉で沖井孝志(あばら家笑司 S49 卒　下関商業出身)さんの生存を確認する!!

所用で福岡に出かけた道すがら、小倉駅で待ち合わせて夕食をとる。健康管理のためのウォーキングと食生活には気を使っているとのことであった。やせ衰えた老人との再会を想像していたが、元気! 元気! 両脚でしっかり歩いていましたよ。

③12 月 3 日(水)新橋で大塚秋夫(春好亭金艶 S49 卒　下関商業出身)さんと語る!!

11 月末に下関の同窓会幹事会の話とノーベル賞を受賞した LED 開発のパイオニア的存在の元日亜化学工業㈱の中村修二氏の「職務発明」への対価報酬について少し話をした。この件についてはこれからも議論が行われていることだろう!!

かけ橋

平成 23 年 6 月に川棚温泉で開催された「OB・OG 会」に当時の市大落研会長の吉村直記君(当時 3 年生)が現役部員として初めて参加してくれた。そのことに感謝して、毎年いたらぬコメントを添えた「賀状」を「落語研究会」宛にだすことにした。3 年が経ち、今年の初めに「追い出し寄席」のチケットと案内状が届いた。「至誠は人を動かす」とは事実だとしみじみ思った。以後、夏の「納涼寄席」、秋の「馬関寄席」と送られてくる。現役部員に感謝!感謝!・・

そして、していただいたことには「礼」を持って答えるべく「かわら版編集局の長府特班員」の千葉里美(S53 卒　下関南高出身)さんに「納涼寄席」の記事をお願いしました。心強い特班員の存在があり「かわら版」編集局としては大助かりです。千葉さんこれからもよろしくお願いしますね!

7 月 20 日納涼寄席取材～
西日本はすっかり梅雨明けです。
空も雲も風も　夏になってしまいました。
行ってきました、市大落研納涼寄席。
とりあえず　入口付近にいた部員を撮ってきました。
右から　花見亭　辛(から)
　　あばら家　屁参(ぷーさん)･･･現部長
　　花見亭　三九(ざんく)
　　春好亭　計(メジャー)

部長の本名　　曽禰　拓郎(そね　たくろう)

(下宿の住所と☎は個人情報保護のため見掲載としました。あしからずご容赦ください)

編集後記

私心(わたくしごころ)を脱し世の中を見るようになると、外国や国内で起こっている「ちょっとしたできごと」から「心ときめく序章」を感じることがある。今年は9月18日のスコットランド独立住民投票であった。そして、時を同じくして9月29日にはウイスキーの製造にまつわるNHK朝ドラ「マッサン」が始まり、おかげでスコットランドの映像を目で見、近所の家からこぼれ出てくるスコットランド民謡 「オールド・ラング・サイン」を耳で聞く機会も増えた。

さて、少なくとも現在50歳以上の国民は、学校で卒業生を送り出す定番に歌った曲であり口ずさむことができる。そうです! 日本版で言えば「蛍の光」です。ゆったりとした旋律の中に「選び抜かれた」七・五調の言葉を駆使し、まとめられたこの歌詞は実は1番から4番までありました。

ところが、残念ながら昭和50年代から「仰げば尊し」と「蛍の光」は地方の一部の学校を除けば、ほとんど歌われなくなってしまいました。そして「旅立ちの日に」、「贈る言葉」、「さくら (森山直太朗の曲)」』等、その時代のヒット曲を中心にする学校が散見するようになった訳です。随分以前になりますが地元の教育委員会と学校にそれとなく「歌われなくなった理由」をお聞きしたところ「民主主義的でないことと文語体で内容が難解」であるとのことでした。

ただ、平成18年12月に文化庁・(社)日本PTA全国協議会主催で実施された「親子で歌いつごう日本の歌100選」の選考で、第1位は「仰げば尊し(作詞・作曲不詳」、「蛍の光(作詞: 稲垣　千穎　作曲: スコットランド民謡)」も堂々第85位にランクしました。そして、この発表会は翌年の3月にNHKテレビでも番組放送されました。よって、「志」のある学校で「蛍の光」が復活するのではないかと内

心期待していましたが、ほとんどの学校は無関心のまま現在に至っているのが現状です。

この二曲の歴史を調べますと、「仰げば尊し」は明治 17 年、「蛍の光」は明治 14 年にそれぞれ小学校唱歌として歌われだしています。当時は、ヨーロッパや米・英国列強諸国からのアジアの植民地政策から逃れるために、西洋音楽を取り入れ学校教育においても諸外国に近代化を示す必要があったのがその理由です。西洋から取り入れた「曲」に合った「日本的な歌詞」を付けるために、取り組まれた文部省音楽取調掛の多くは「国学」に対する深い造詣があり、文語体であったが内容においては「中国の漢詩の引用」から始まり「故事」や「日本人の美学や覚悟・道徳観念」等が組み込まれた極めて高度で格調高い歌詞を作りあげました。

結論として「スコットランド」の英国からの独立は成りませんでしたので、私の「蛍の光」の日本の学校で復活させるもくろみは少し期待が薄れました。しかし、経済学を学んでいる市大生にとってはとてもなじみの深い「経済学の父」と言われるアダム・スミスの出身地はスコットランドです。この国の民謡の日本版である「蛍の光」は銀行員時代に米国の友人の結婚式でも歌われていましたし、英語圏の国々では日常的にオーケストラでも演奏される「世界共通の名曲」であることをお伝えするとともに、「蛍の光」の歌詞 4 番までお伝えして編集後記としたい。

蛍の光

作詞　稲垣千頴(いながき　ちかい)　　作曲　原曲はスコットランド民謡「オールド・ラング・サイン」

一、蛍の光、窓の雪
書（ふみ）読む月日、重ねつつ。
いつしか年も、すぎの戸を、
開けてぞ今朝は、別れ行く。

【直訳】蛍を集めた光や雪の明かりを頼りにして、貧しくとも共に苦労して勉学に励んできた友よ、いよいよお別れの時が来ましたね。

二、止まるも行くも、限りとて、
互（かたみ）に思う、千萬（ちよろず）の
心の端（はし）を、一言に、
幸（さき）くと許（ばか）り、歌うなり。

【直訳】学舎にとどまる人も、また学を修めて卒業し、旅だってゆく人も、今日を限りと思って、お互いにかわした心の架け橋、永遠の絆を、無事にあれとばかりを念じて、この歌の一言に思いを託して歌います。
※「かたみにおもう」＝お互いに思う 「さき（幸）く」＝無事に

三、筑紫の極み、陸（みち）の奥、
海山遠く、隔つとも、
その眞心（まごころ）は、隔て無く、
一つに尽くせ、國の為。

【直訳】九州の端や東北の奥まで、海や山々によって遠く離れていても、真心はただひとつにして互いに国の発展の為に尽くそう。
※「つくし（筑紫）」＝九州の古い呼び方 「みちのおく」＝陸奥。東北地方

四、千島の奥も、沖縄も、
八洲（やしま）の内の、護（まも）りなり、
至らん國に、勲（いさお）しく、
努めよ我が背、恙（つつが）無く。

【直訳】千島列島の奥も沖縄も、日本の国土の守りだ。学を修め職を得て、どこの地に赴こうとも、日本各地それぞれの地域で、我が友よ、我が夫よ、我が兄弟よ、どうか無事にお元気で、勇気を持って任にあたり、務めを果たしていただきたい。
※「やしま」＝八島、八洲。日本の国の古い呼び方 「いたらんくにに」＝国の至る所で「いさおしく」＝勇ましく 「せ」＝背、夫、兄。兄弟とか友 「つづがなく」＝お元気で